広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	モリエールの宗教観 : ユマニストとしての視点
Author(s)	三木, 島彦
Citation	フランス文学 , 19 : 10 - 19
Issue Date	1992-07-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040989
Right	
Relation	

モリエールの宗教観

ーユマニストとしての視点ー

三　木　島　彦

十七世紀の人々は，常識の中に自然の心の傾向を認め，それに基づいて様々の価値判断を行った。もう一つ別の視点から眺めれば，肉体的なものと緊密に結びつく心の存在を積極的，肯定的に受けとめたといえる。同時代のモリエールの宗教観もそういう意味で人間的なもので，本論ではこうした伝統の中にそれを位置づけることを試みたい。

モリエールの態度は『亭主学校』『女房学校』など宗教に基づく女子教育の批判にも垣間見ることができるが，厳格主義を否定し，言葉に頼った多過ぎる規則を取り払い，それらをむしろ常識として個人個人が自分の中に内面化してゆくことを求める。この考え方は十六世紀にすでにあったものである。すなわち『ガルガンチュワ物語』の中で，人間形成に関わる教育の問題が扱われている。詰め込み教育の元祖のような衒学者から数年間教育を受けたガルガンチュワは，全くの薄のろ，態度物腰いずれもぎこちなく人前でろくに口も利けない有様，これに対し自然のままに育った若者が，実に優雅な立ち居振る舞いで適確な言葉を用い，礼節をわきまえた立派な挨拶をする。

教育の目指すところは，個人の自然に与えられた良き傾向を助長し，性格を作り上げることにある。当時の修道院の堕落振りを批判して，ラブレーが創作したテレームの僧院は，「汝の欲するところをなせ」を唯一の規則とした。

自分自身を律してゆくのに時計に頼る必要はない。優雅な，生まれの良い人間なら自分の寝たい時に寝，食べたい時に食べていれば，それがすでに調和的な，立派な生活になっている。であるから，自分自身を制御してゆくのに鐘の音に頼るのはばかなことである，自分の持っている良識や悟性 bon sens et entendment に従えと言っている。良識や悟性は，モンテーニュを通してデカルトやモリエールによって継承されている。

渡辺一夫氏は，テレームの修道院の人々のうちに，ストア学派的な自由，福音主義的な自由を認め，これが十七世紀のオネットムにつながってゆくのではないかと述べている[1]。理想の人間像としてのオネットム honnête homme を，デカルトは『方法序説』の中で「良識を備えた人間」homme de bon sens として掲げている。およそ人間について語ろうとする人は，自分なりの理想の人間像を予め心の中に抱いており，これを基準に人間や社会，

風俗を判断する。『エセー』の中でも，homme de bien, homme d'honneur, galant homme, gentil'homme，そして honneste homme などがそうした概念を表している。

『方法序説』を始める有名な言葉は，良識が万人に平等に与えられているもので，このことについては，他のことでは満足していない人も自分の持っているもので満足しているのだと述べている。デカルトはこの良識をもって，よく判断し真と偽を弁別する能力なのだと定義し，併せて理性もしくは自然の光と呼んでいる。周知のように，『方法序説』の冒頭の文章は『エセー』の中の一文が下敷きとなっている[2)]。モンテーニュでは，bon sens が sens である。これは「人間は自然に従うべきだ」と述べる際の「自然」に相等する。そうしたものを人間の本性と見る点でラブレーの考えと一致しているのである。

こうした点から，デカルトもまた知識より判断力の重視を訴えていることが理解される。彼は特殊なことに対する詳細かつ専門的な知識より，素人的に広い分野に渡って教養を持つことの効用を認めている。まずもってそういう人たちを相手に自らの学問の方法を理解してもらおうというのである。

このようなデカルトの態度は，モリエールにも共通している。『タルチュフ』におけるクレアントの次の台詞である。

> 私は人から尊敬される学者ではありませんし，知識があるといえるほどものを知ってはいません。けれども，ひとことで言って，私の学問のすべてといえば，本物と偽物を見分けることができることです[3)]。

モリエールは，彼の喜劇の真価を問うべき人たちに対して同様のことを求めているわけである。『女房学校批判』の中では，衒学者の錆びついた知識より，単純で自然な良識こそ自らの喜劇の価値を判断する試金石であると主張し，加えて平土間の客の中にこそ常識 sens commun があるのだと述べている。このように意識的に「平凡さ」を志向する態度が十七世紀古典主義理論を貫いて流れる一つの傾向として存在する。

この良識に基づいて，『タルチュフ』の中で，真の信心と偽の信心，真の宗教的熱情と偽の宗教的熱情とが区別されている。人間的なもの，すなわち善として，偽善や狂信につながる厳格主義や不寛容を偽物ではないかと論難するクレアントに対して，狂信家のオルゴンは，分別くさい理屈は理屈として自由思想 libertinage の匂いがすると言って非難するのである。良識なるものを理性と同一視して考えるなら，モリエールの立場が信仰を理性で判断するものとして非難されたことが，当時において一般的な傾向であったことはうなずけよう。

モリエール自身は，誠実なキリスト教徒であろうとしたはずである。信仰の問題を喜劇

の舞台で上演し，論じたことに対する非難については，「『タルチュフ』序文」の中で，歴史的にキリスト受難劇が人々の宗教的な教化に貢献したこと，近くはコルネイユの聖者劇が人々に感動をもって迎えられたことなど引き合いに出し，理解を求めている。また信心生活の合い間の気晴らし divertissement としての喜劇の効用を強調している。

その上で，演劇もまた人間の仕事である以上，腐敗堕落することもあったと認めている。とはいえそれは人間的なものが包含している過ち易さや欠陥を一般的に捉えたもので，むしろ自身の立場を一層強固に弁明するための戦略であったといえる。

> 私は喜劇が腐敗堕落した時代があったということは認める。とはいえ世の中に日々刻々堕落させられることが全くなかったようなものが何かあったろうか。人間がそこに罪をもたらすことができなかったそれほど無垢なものはない。人間がその本来の意図をくつがえすことができなかったほど有益な技術は全く存在しない，人間が悪い用途に転用しえなかったほどそれ自体善なるものは何もない[4]。

モリエールは，本来は良き意図で始められたものも用い方を誤まれば，人間にとって有害なものとなる，あるいは長い間行われていれば，そういう併害を生じるのはむしろ必然であると考え，絶えざる自己反省の試みが必要なのではないかと訴える。

学芸 art とは有限の生命しか持たない人間の生み出したものである。モリエールは，その例として演劇のほかに医学や哲学を挙げている。さらに宗教もそれが人間に関係のあるものである以上，こうした腐敗堕落は免れないのだと言う。

> 最も神聖なものさえも人間の腐敗堕落から庇護されるものではない。私たちは，極悪人どもが毎日，信仰心を悪用し，これを最も大きな罪のために利用しているのを見ている。けれども，私たちはそのために絶えず，なさねばならぬ区別をし続けているのである。私たちが腐敗させられる事物の持つ善良さと，腐敗させようとする者たちの悪意とを，誤った一つの結果の中に包含してしまうようなことは全くない。学芸の本来の意図とその悪用とはいつでも区別されるものなのである[5]。

このことに関連するが，モンテーニュは，『エセー』第１巻第30章「節制について」の冒頭で，中庸を失い，極端に走ったものは，徳であってもすでに徳ではないという考えに反対し，我々は徳においても過度に陥ることはあるのだと述べている[6]。さらに，本来良き意図から出発したものも極端に走り，その本義を見誤るならば，人間にとって有害なものになりかねないという考えを，第２巻第19章「信仰の自由について」の中で表明している。

彼はこの章の冒頭をこう始めている。

よい意図が度を越して進められると人間をきわめて不徳な行為に追いやることはよくあることである[7]。

モンテーニュは，カトリックの信仰を守っている人たちの党派を最も善良で，健全な党派であるとして支持を表明している。さりながら次の様にも言っている。

しかしそれを信奉する正しい人々の間にも，(…) 熱情に駆られて，理性の埒を越え，ときとして不正な，過激な，無謀な考えに走る者もたくさんいる[8]。

モリエールもまたモンテーニュと同様に，gens de bien という言葉を使っている。彼はまさにこうした真の信者 vrai dévot，正しい人々に語りかけているのである。

私がいたる所で私の喜劇の筋立てについて弁明したいのは真の信者に対してなのです[9]。

モリエールは，真の正しい人々véritables gens de bien と呼んでいるが，こうした人々が偽善者や狂信家に影響され，彼らの党派に加わることが決してないように懇願している。このことは良識に基づき判断する素朴な人々であれば，自らの言葉を理解してもくれようという期待でもある。

モリエールは，クレアントの口を通じて偽の信者がどういうものであるかを語っている。

あの連中は，自分たちの熱心さと悪徳とを結びつけるすべを知っています。気が短く，復讐心が強く，真心がなく，策略に満ち，人を破滅させるために，厚かましくも天の利害でもって，彼らの恐ろしい憎しみをおおいかくすのです[10]。

モリエールは，良識に基づいて真の信心 vraie dévotion，真の宗教心 vrai zèle を唱えているが，これはまた「人間的で心地よい信心」dévotion humaine et traitable として言い換えられている。そこではすべてがやさしく，思いやりがあり，家族の死を素直に悲しみ，他者の行いは善意に解釈し，復讐を思わず，一人の罪人がいるとしてこれを限度を越えて攻撃するようなことはない。

モリエールが非難しているのは，これと正反対の狂信家や偽善者である。オルゴン家で

毛肌着や鞭を見せびらかすタルチュフ，オルゴンの口から語られる初めての出会いの時の，タルチュフのこれ見よがしの信者ぶり。例えば，オルゴンから貰った施しの一部を教会の前で貧者に分けてやる情景である。『マタイ福音書』第六章には，施しをする時，右の手のしていることを左の手に知らせるな，苦行をしている時，人前で陰気な顔をするなとある。人には自分の善行や苦行を隠し，隠れたことを見ておられる神を思えと記されている。

オルゴンの話では，タルチュフの指導のおかげで，この世の空しいものへの愛着から解脱した心は，目前で家族が死ぬのを見ても動揺しないという。クレアントは，それが人間の感情ですかと反駁する。またオルゴンの母親で，息子に輪をかけた狂信家であるペルネル夫人は，友人との会話，交際を罪悪と見做し，ダンスなどの娯楽を否定し，あくまで謹厳な顔付きや態度を崩さない。この同じ人物が他人の粗探しばかりして，自分のことは全くお留守になっている，つまらぬ人間を立派な人であると信じ込んでいる。

モリエールは，信仰の達する高い境地とされる無感動性 insensibilité を否認するものではない。そうではなく，聖人ならともかく，在俗の一般の人々にはむしろ違った行き方があるはずだと考えている。彼は信心生活の上で厳格主義を唱える人たちのことをこう評している。

> 彼らが私たちの魂をそこまで高めてくれようとしている，あの完璧な無感動性は，美徳の高次の段階である。私はそのような完徳は人間性の力のうちにはないのではないかと思うのだ。だから，人間の情念に修正を加え，これを緩和することに努める方が，これを全く断ち切ってしまおうとするよりも，もっといいのではないかと思うのである[11)]。

人間性に固有の欠点や悪徳を無くしてしまうのではなく，それを自覚することによって是正し，緩和する。それがモリエールの性格喜劇の態度である（一般にモラリストと呼ばれる人々の共通の姿勢でもある）。ところで，ここではさらに進んで人間の心の存在に積極的な意義付けを認めようとしているのである。人間として様々な場面でつらい思いをしたり，誘惑を感じたりするのは，自然の感情である。家族を失って悲しくないはずはないのであって，むしろその悲しみを素直に認めて，その上で自分自身を見失わないように心を導くのが人間的な態度だと考えるのである。それ以外のものを普通の人間が目指すとすれば，それは間違いであり，欺瞞ともなりかねない。この点で無念無想の高い境地などというものは，評価されないのである。

モンテーニュは，このような態度について「人々は自分から脱け出し，人間から逃げた

がる。ばかげたことだ。天使に身を変えようとして動物になる」[12]と述べて，非難している。精神的なものを重んじるあまり，肉体的なものを軽蔑するのは正しい在り方ではないと考えているのである。精神と肉体の調和を理想とするモンテーニュは，『エセー』の最終章で次の様に述べている。

> (…) この人々は，強烈な希望に支えられて，キリスト教徒の最終の目的であり，究極の到達点であり，唯一の恒常不変な快楽である永遠の糧を，あらかじめ享受しているから，われわれの貧弱で不定で曖昧な幸福を軽蔑して，肉欲的な現世的な糧についての配慮や享楽を，気易く肉体に任せるのである。(…)われわれ凡俗の間では，私は常に，もっとも天上的な思想ともっとも現世的な生活の間に奇妙な一致があることを見て来た[13]。

これまでのところを本論の冒頭に掲げた理想の人間像オネットム honnête homme の概念との関連において考えてみることにする。モンテーニュは，オネットムという語を後世に定着する十七世紀的な意味で用いた最初の人である。『エセー』第1巻第26章「子供の教育」の中で，文法学者や論理学者にではなく，ジャンティヨム gentil'homme に子供を育て上げなくてはならないと述べている。パスカルが『パンセ』の中で行ったオネットムの定義はこれを踏襲しているが，モンテーニュも他の箇所では，オネットム honneste homme の語を用いている。すなわち，型にはまらない，自由な思考のできる人間，奴隷ではなく自由人，広い意味での生まれの良さ bonne naissance を備えた人間であり，オネットムに育て上げるとは，高邁な心の涵養にほかならない。

honneste の語源は，ラテン語の *honestus* で，「気高い」「優雅な」「高貴な生まれの」「礼節 bienséance に適った」などの意味を持っている。モンテーニュは，「レイモン・スボンの弁護」の中で，「神を信ずれば，正しく幸福な生活にいたる道は近い」というラテン語の引用を行っているが，「正しい生活」とは *vita honesta* である。この形容詞の中性形 *honestum* は，「徳義」「美しさ」の意味の名詞として用いられ，キケロの著『義務について』*De Officiis* に使用例がある。フランス語では，モンテーニュのように honneste を名詞として用いたり，honnêtete が当てられる。

G.ドゥフォー氏は，ラテン語の *decorum* に convenable, bienséance の訳語を，*honestum* に beauté morale の訳語をそれぞれ与えている。そして「適切なものは美しく，また美しいものは適切である」《ce qui est convenable est beau, et ce qui est beau est convenable (*et quod decet, honestum est et quod honestum est, decet*)》というキケロの引用を行っている[14]。*honestum* は内面的な調和，すなわち精神的，道徳的な美について用

いられ，これに対して *decorum* (convenance, bienséance) は外形に現れるものについて用いられる。このことは内面の充実が均整のとれた美として，形となって現れるはずだとする古典主義の理念と合致している。

モンテーニュにおける honnêteté とは，人間の情念，すなわち肉体的なものを否定するものでないことが次の言葉にもうかがわれる。

> 彼らはわれわれが礼節とよぶもの，つまり隠れてすれば正しいとされることを人前で遠慮してしないことを愚かなことだと言い，自然や習慣やわれわれの欲望がわれわれの行為として公言しているものを，上品ぶって秘密にしたり否認したりすることを，悪徳とみなしていた[15]。
>
> （礼節：honnesteté，正しい：honneste）

すなわちモンテーニュによれば，honnêteté とは隠されていれば悪くない，正しいことをそれと心得て，人前に現さないようにすることである。たとえば男女の性に対する彼のおおらかな態度は，このことを前提にしている。honnêteté が人間の本性を認め，これをそのままに受け入れていることを示唆している。さらに，モンテーニュが「高邁な心はけっして心にもないことを言ってはならない。高邁な心は自分を中まで見せようとする」[16]と言う時，彼は自分の心の傾向を積極的に認める方向に向かう。それが善であり，人間的であると考えている。

精神と肉体の対立，そしてその調和という問題は，デカルトの哲学にとっても大きな柱の一つであったし，アウグスチヌス以来，キリスト教思想の中でも課題とされてきたことである。人間の有り様を道徳的に捉え，いかにすれば良く生きることができるかを考えるには，この問題を避けて通ることはできない。心の中には怒り，悲しみ，喜びなど激しい感情の動きがあり，デカルトがこれを精神の受動 passions と呼んだのは周知の事実である。彼の道徳の根幹も肉体に密接に結びつくこうした心の動きの存在をそのままに認めるところから出発する。情念を抑えるということは，激しい感情を無くしてしまうのではなく，正しい価値判断に基づいてこれを評価し，感じ取ること，すなわち知的に支配することなのである。

ここで，デカルトの『情念論』の中から次の一節を取り上げてみよう。

> そこで，人々が精神の低い部分，いわゆる「感覚的」部分と，高い部分，いわゆる「理性的」部分との間に，あるいはむしろ自然的欲求と意志との間に，思い描くのをつねとする戦いのすべては，身体がその精気によって腺のうちにひき起こそうとする運動

と，精神がその意志によって同じ腺のうちに同時にひき起こそうとする運動との間の，対立にほかならないのである。というのは，われわれのうちにはただ一つの精神しかなく，この精神はみずからのうちに部分の相違をもたないからである。感覚的であるところの同一のものが理性的なのであり，精神のすべての欲求は意志なのである[17]。

モリエールが『タルチュフ』の中で表明している「人間的で心地よい信心」については，最近の研究で「敬虔なユマニスム」humanisme dévot との関連が指摘されている。そこでその代表的な人物であるフランソワ・ド・サルの言葉を彼の著『信心生活の入門』から取り上げてみる。この引用ではデカルトと違って，当時の伝統的な考え方に従い，精神を高い部分と低い部分とに分けていることがわかる。

（…）我らの霊魂は，上下の二部に分れている。そうして，下部は必ずしも上部に服従せず独立して行動する。それゆえ，誘惑に際して，下部が上部の同意なく，その反抗にもかかわらず，これに快感を覚えることがある。聖パウロが『肉の望むところは霊に反し，霊の望むところは肉に反す』といい，また『わが五体に外の法ありて，わが精神の法に敵対す，云々』等と記載した，内心の争闘はこれに外ならぬ[18]。（霊魂：âme）

しかしながら，フランソワ・ド・サルにとって，肉の誘惑を感じることと，それに同意することとは別物なのである。誘惑に悩まされたとしても，断固これに同意しなければ罪とはならない。むしろ精神的な危機に際し，理性的，知的な欲求に従う「高い意志」volonté supérieure を用いて，試練に耐え，善行に励むことが神の御心に適うとする。

『信心生活の入門』は，十七世紀に広く読まれた書であるが，中庸の思想，自分と同じ徳の生活を実行しない者を非難すべきでないこと，毛肌着，鞭など人目を引く苦行を最重要視しないことなど，聖書に典拠を求めながら親切に説いており，モリエールの喜劇の中で称揚された，あるべき信心の姿と共通の細部を持っている。フランソワ・ド・サルは，神を愛する傾向は誰の心にも備わっているのだとする。彼は気晴らしとして，ときに友人と談笑し，ふざけたりすることも勧めている。また，ダンスをもってそれ自体は良くも悪くもないものなのだと言っている。その点について非難を受けたことを自ら語っているが，モンテーニュの愛した，普通の人間的な模範 modèle commun et humain は，こうしたものを指しているものと思われる。

註

1）ラブレーは，生来自分の意志で善悪を選び取る自由を与えられている人間の心の働きを《honneur》と呼んでいる(RABELAIS, *Gargantua*, chap. LVII, in *Oeuvres complètes*, ed. J. BOULENGER et L. SCHELER, Bibl. de La Pléiade, Gallimard, 1955, pp.159-60. ラブレー・渡辺一夫訳『第一之書ガルガンチュワ物語』岩波文庫，昭48，248～9頁)。渡辺一夫氏は，これを「良知」と訳している。すなわち孟子に「慮らずして知る所の者は，其の良知なり」とあり，これは生来人間が備えている是非，善悪，正邪の判断力を意味している。それを養うことで知識と行いを一致させることが大切なのである。

2）Cf. MONTAIGNE, *Essais*, liv. II, chap. XVII, in *Oeuvres complètes*, ed. A. THIBAUDET et M. RAT, Bibl. de La Pléiade, 1962, p.641. このことについてはすでに拙論『モリエールにおける《nature, bon sens, raison》－モンテーニュ，デカルトとの関連を中心に－』(日本フランス語フランス文学会中国・四国支部機関誌・フランス文学第17号：1989）において詳述している。

3）*Le Tartuffe*, acte I, 5, vv. 351-4, in *Oeuvres complètes de Molière*, ed. G. COUTON, Bibl. de La Pléiade, 1976, p.909.

4）*Préface du Tartuffe*, pp.886-7.

5）*Ibid*., p.887.

6）この箇所でモンテーニュは，謙虚さや中庸の美徳を説くために，聖パウロの『ローマ人への手紙』第12章第3節からの引用を行っている。《Ne soyez pas plus sages qu'il ne faut, mais soyez sobrement sages.》ところでモリエールと同時代に，ボシュエもこう言っている。《Prenez garde de ne vouloir point être sages plus qu'il ne faut; mais d'être sages sobrement et modérément.》(*Oeuvres complètes de Molière I*, éd. R. JOUANNY, Classiques Garnier, 1979, p.923.)

7）*Essais*, liv. II, chap. XIX, p.650. 以下，モンテーニュの引用の訳はすべて原二郎氏（岩波文庫，昭41～3）による。

8）*Ibid*., p.651.

9）*Préface de Tartuffe*, p.884.

10）*Le Tartuffe*, acte I, 5, vv. 373-6, p.909.

11）*Préface du Tartuffe*, p.888.

12）*Essais*, liv. III, chap. XIII, P.1096.

13）*Ibid*., p.1095.

14）G. DEFAUX, *Molière ou Les Métamorphoses du comique* — De la comédie morale au triomphe de la folie, French Forum, 1983, p.88.

15) *Essais*, liv. II, chap. XII, p.568.

16) *Ibid*., liv. II, chap. XVII, P.630.

17) DESCARTES, *Les Passions de l'âme*, Ire partie, in *Oeuvres choisies II*, éd. L. DIMIER, Classiques Garnier, 1930, pp.31-2. 引用の訳は野田又夫氏による(『世界の名著27(デカルト)』中公バックス，昭53)。

18) Saint FRANÇOIS DE SALES, *Introduction à la vie dévote*, IVe partie, chap. III, in *Oeuvres*, éd. A. RAVIER, Bibl. de La Pléiade, 1986, p.259. 引用の訳は，戸塚文卿師による(『信心生活の入門』中央出版社，昭53)。